

基肄城築造1350年

基肄城を知る

12

— 絵画資料にみる基肄城 —



基山には、江戸時代の基山の地理を知り得る資料として現在の地図に匹敵する絵図が残されています。

今回取り上げる資料は、そのひとつ、基肄城に特化して描かれた資料で、文化9（1812）年の写しとして知られる、『椽之城 太宰府舊蹟全図 南

（以下「南図」と記載）です。

この絵図には『大野城 太宰府舊蹟全図 北』が存在し、南北両図を合わせて、絵図名称が示すように「大宰府」に関わる旧蹟を表現しています。基肄城が描かれている「南図」には、基肄城跡の土塁・石塁線が描かれ、その中に水門や礎石とともに、

当時呼称されていた地名などが記されています。

描かれている土塁・石塁線を見ると、昭和23年に撮影された航空写真から復原される土塁・石塁線に極めて近い形で描かれており、当時の描写力の高さを改めて知ることができます。

この「南図」の中には、気になる地名がいくつか記されています。全てを記すことはできないので、皆さんに知っていただ

きたい2箇所を紹介しましょう（詳細は、『基山町史 資料編』をご覧ください）。

●「北ノ御門」

今は、「北帝門」として知ら

れている箇所に、この絵図では「北ノ御門」と記されています。基肄城の北の門、いわば大宰府から入るための正門にあたるものと考えられ、江戸時代の描写者の認識で「北ノ御門」と呼称していたものです。読みから考えると「きたのごもん」「きたのみかど」の両者があつたと想定でき、後者の読みに対する当て字が「御門」から「帝門」に変化したのでしよう。地名は、読みが優先され、そこに当てられる

字は、その時々によって変化している一例と言えます。

●「塔ノ礎也」

もうひとつ、

「南図」の北西域に「塔ノ礎也シン柱穴旦リ 壺尺八寸」

と記されています。基肄城からは、奈良時代後半の食器（須恵器の蓋）に「山寺」と墨書したのも出土しており、南の護りである基肄城にも寺院があつたことを伺わせます。

奈良時代後半の社会情勢は、白村江の戦いに勝った新羅が再び日本に攻めてくるという噂や、唐の皇帝への拝謁席次に端を発した新羅との確執から、新羅の国王を呪詛（呪い殺す）するため四王院を築くという事態が生じていました。

基肄城跡では、現状で絵図にある位置に、この記載に匹敵する礎石は見つかっていません。絵図が描かれたときから、城内で植林が行われていますが、地形を大きく改変するものではないことから、今後見つかるかもしれません。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



椽之城 太宰府舊蹟全図 南
（福岡市博物館所蔵 ※抽出・改変）



昭和23年撮影の航空写真